

バングラデシュで見たもの

樋口 隆哉

山口大学大学院 理工学研究科
〒755-8611 山口県宇部市常盤台2丁目16-1

2008年の夏、バングラデシュの田舎地方でバイオマス燃料使用時の室内空気質の調査をする機会がありました。大学の私の教員室の隣にバングラデシュから来た先生がおり、その先生の誘いに乗って(いや、まんまと乗らされて)、この南アジアの地を踏むことになったのです。バイオマス燃料の使用による室内空気汚染の問題については、中国、インド、モンゴル、バングラデシュなどで汚染物質や健康影響などに関する調査がなされていますが、今回は宗教的・民族的に異なる地域を対象に約40世帯を訪問しました。

今回は、本欄に寄稿させていただく機会に恵まれたのを機に、初めてバングラデシュを、それも特に田舎を訪問して私なりに感じたことを(学問的内容はさておき)勝手につづらせていただきます。

訪問した田舎地方の住居は、大体粘土を固めて土台を作り、壁は木や葉または粘土でこしらえてありました。屋根は木や葉を使ったり、一部はトタンを葺いたりしていました。調査対象がコンロのある調理場だったのですが、大体コンロはどこも同じ形状で、竈が半分床に埋まったような状態でした。バイオマス燃料としては、木、落ち葉、枯草などに加えて乾燥させた牛糞が多く用いられていました。指の太さ程度の木の枝に握り拳程度の牛糞を串団子状に連ねたものがコンロの脇にどっさり積み上げられていました。

さて、調査は汚染物質の発生状況などを数人で分担して進めていたのですが、何しろ外国人が通常訪

れない地域で、しかも測定機材などを持っているので、たちまち黒山の人だかりです。人が群がって調理場が塞がれ、蒸し暑さから噴き出す汗とコンロの煙が目にしみて出る涙で、えらいことになりました。でも、住民の方は親切で、休憩時にココナッツを割ってくれたり、団扇で扇いでくれたりしました。

訪問した家は鍵などなく、ある家の軒先を通り抜けて隣の家に行ったりするなど、室内と室外が緩くつながっているという印象を受けました。これは気候風土や生活レベルが大いに影響している結果でしょう。その分、数世帯が寄り添って協力しながら生活しているようでした。日本でも最近では町自体を塙で囲んで外部と遮断した生活を送っている人がいるようですが、生活が豊かになると得られた富を守る必要が生じて、次第に内と外をはっきりと仕切る社会になってくるということなのでしょう。

また、物珍しさで群がる人は大人も子供もまっすぐにこちらを見つめてきます。にらめっこする気も萎えるくらいにじっと見つめてきます。生きていくために周りから多くの情報を得ようとする普通の意識がこのような外国人を見る視線に現れているのかもしれないと勝手に想像しながら、人々のたくましさを感じました。

日本での生活では見えなかった何か、私たちが手に入れたものと失ったものが、バングラデシュを訪れることによって多少なりともぼんやりと見えてきたような気がしています。